壁に咲いた花

南水　梨絵

　およそ一年と八か月ぶりにシイナから連絡があったのは、十月最初の木曜日のことだった。長く降り続いた秋の雨がようやく上がり、空には薄い雲が果てなく広がっていた。わたしは勤め先の大学図書館にいて、外のベンチでひとりお弁当を広げていた。ぴろりんと小さく鳴ったスマートフォンを手に取り、画面に彼女の名前を見つけたときの衝撃は、忘れられない。雲間から滲んだ太陽の弱々しい光さえ、まるで何かの啓示のように思えたくらいだった。

　いつのまにか携帯電話を解約していたシイナが連絡をよこした手段は、フェイスブックのメッセージ機能を介してだった。わたしの前から姿を消す直前、彼女はあらゆるＳＮＳのアカウントを削除したのだと思っていたけれど、フェイスブックだけは忘れていたのか、それともあえて残しておいたのか、アカウントが生きていたようだ。ということは、努力さえ惜しまなければ彼女に連絡を取る方法は存在していたわけだが、わたしはその努力を怠った。この二十か月余りのあいだ、努力を怠ることによって、シイナがいないという事実を自分に突きつけ続けていたのだ。

　彼女はメッセージに『会いたい』とだけ書いてきた。たとえば『会える？』といった、こちらの反応をうかがうような、あるいは返事を促すような書き方だったとしたら、容易に無視してしまえたのかもしれない。だけど、『会いたい』ということばを見たとたん、そのたった四文字のなかに、わたしがかつて焦がれた彼女のすべてが込められている気がした。返事をしないわけにはいかなかった。もしもそれが彼女の計略だったのならば、完全にわたしの敗北だった。

　再会の日取りが決まって以来、一年八か月ぶりに対面する場面を何度も思い浮かべた。脳内で繰り返される映像は、残念ながらどれもシイナがこちらに背を向けるところで終わっていた。はじめにどれだけ和やかな再会が描かれようと、やがて彼女がくるりと向ける背中に繋がっていくのだった。

　待ち合わせの喫茶店に、シイナはきっかり十五分遅れてやってきた。

　扉の上部についたベルがからんころんと鳴り、顔を上げると、早足にこちらへ歩いてくる彼女の姿が認められた。あっと思うか思わないかのうちに、わたしのいるテーブルのそばまで来て、立ち止まった。そして、こちらが気後れしてしまうくらいに完璧な笑顔を見せ、「仁菜子、お待たせ」と特有の低い声でいった。現実にシイナが現れたことに動揺したわたしが、ああ、とか何とか曖昧なことばを唇の内側でもてあそんでいるあいだに、相手は丈の短い上着をさっと脱いで腕にかけ、まるできのうも会っていたかのような自然な様子で、向かいの席に座った。とたんに、この日に至るまでに幾度も思い浮かべた場面が、繰り返し眺めた後ろ姿が、すっと視界の隅をかすめていった。

　ジーンズに大きめのプルオーバーを身につけた彼女は、ひどく痩せたように見えた。化粧気のない顔は相変わらず美しかったが、いくぶん日焼けしてくすんでおり、以前の、生気のみなぎった活動的な印象は薄まり、うちに秘めた危うい何かが見え隠れしているように感じられた。ふと、目の前のシイナからかつてのシイナがすうっと分離していくような錯覚がし、目がちかちかした。

「はじめまして」とシイナがいった。

わたしは驚いて彼女を見返した。すると相手はふっと笑って、「とでもいいたげな顔をしていたから」とつけ加えた。それが冗談だったのだと気がついた頃には、彼女はもうこちらを見ておらず、通りかかった店員に珈琲を注文していた。

それからの数十分は、シイナがした質問にこちらが答える、といった形式の会話で過ぎていった。「ご両親は元気？」「ええ。母親は相変わらず透析に通ってる」「いまも大学の図書館にいるの？」「もちろん。ちゃんとしがみついてるよ」といった形ばかりの会話が主だった。わたしの方からはほとんど質問をしなかった。というよりも、彼女の醸し出す雰囲気が、かたくなに質問をさせてくれなかったといった方が正しいかもしれない。

やがてシイナが、座面の固い椅子に飽き飽きしたとでもいわんばかりに両手を高く上げて伸びをし、「そろそろ行こうか」といった。どこへ？　という顔をしたはずのわたしに向かって、「仁菜子の家」と事も無げにいった。

ほんとはね、急に訪ねていって仁菜子を驚かそうと思ってたんだ、とシイナは玄関で靴を脱ぎながらいった。でも、そういうの、すごく嫌がるでしょ、あなたは。サプライズ的なやつ。怒って追い返されるかと思って。だからやめておいた。彼女はにこりと笑い、靴を丁寧に揃えてから、家主を置いて先に奥へと歩いていった。わたしがいまだに同じ部屋に住んでいることを微塵も疑わないところに、率直な性格が表れていた。彼女の本質は何も変わっていないと分かり、泣きそうになった。

もしも、とわたしは想像する。彼女が本当に突然やってきたとしても、怒ることも追い返すこともできなかったはずだ。もちろん激しく心を揺さぶられただろうことは間違いないが、今もこうやって従順に部屋に上げているように、結局のところ、シイナを目の前にして、完全に拒絶することなどできやしないのだ。

わたしが遅れてリビングに入っていくと、シイナは、二人掛けにしては小さすぎる布張りのソファの背もたれに手を置き、室内を見回していた。やがて、ソファを覆い隠すようにして放ってあった洗濯物をぐいと隅に押しやり、すとんと腰掛けた。そして、持っていた鞄のなかから次々と小物を取り出し、ローテーブルに手早く並べていった。歯ブラシやデンタルフロス、日焼け止め乳液、ワイヤレスイヤホン、ルービックキューブ、ハヤカワ文庫が三冊、黒っぽい表紙の写真集らしき薄い本、ジッパー付きの袋に入ったブラジャーとパンツが何組か。どうやら彼女はこの部屋を当面のねぐらにしようと目論んでいるようだった。

マンションに帰りつくまでに聞き出した断片をつなげあわせると、彼女は姿を消してすぐ瀬戸内海の島に移り住んでいたらしい。いまは誰も住むひとがいなくなった祖父母の家が手つかずのまま残されているのだそうだ。そして、今朝その家を出て、フェリーと新幹線を乗り継ぎ東京に戻ってきた。長期間いるにしろ短期滞在にしろ、まずは寝る場所を確保しないといけないという事情は理解できたが、まさかうちを根城に選ぶなんて。彼女の立場に立ってみれば、それはもっとも避けるべきことのように思われるのに。

とはいえ、わたしの側に彼女を追い出す理由など、ひとつもないのだった。シイナがそう望むのであれば、いつまでだってここに住めばいい。わたしはそう宣言する代わりに、「その小さなソファで眠るのはどっちか、毎週土曜日にじゃんけんで決めることにしようか」と提案した。

その夜、わたしたちは狭いソファに並んで座って、缶ビールを飲みながらぽつぽつと話をした。一年八か月というのが「たったの」ということばで安易にくくれないほどぎこちなかった会話が、いつしかするすると滑らかに流れるようになっていった。

先月誕生日を迎えたばかりのシイナが、三十代になったよ、といったときには胸が痛んだ。声の調子に未来を感じさせる響きがなかったことが、彼女にとっての三十代が、想像していた華やかで祝福されたものではないという予感をもたらしたからなのかもしれない。わたしは、あとすこしで追いつくよ、といった。

それからは終始、未来ではなく、過ぎ去った日々についての話をした。それらは主にふたりが出会った頃、中学時代の話だった。ほんとうの幸せも残酷な未来も知らない、愛おしいほどに純粋なわたしたちに起きた、取るに足りない出来事ばかりだった。

長くて短い時間が流れ、いつのまにかシイナの肩に頭を預け、眠りに落ちそうになっていた。そんなわたしの耳もとで、彼女がささやいた。「明広はさいごまで仁菜子のことを愛していたのよ」

はっとなって目を開け、体を起こした。それまでは、巧妙に避けていたはずの明広の話題だった。彼女の方から持ち出されるとは思いもしなかった。さいごに見た彼の穏やかな顔が、脳裡にちらついた。ほんのすこしだけ視線を動かしてシイナの方をうかがうと、うつむいた横顔には何の表情も浮かんでいなかった。それを見た瞬間、わたしは彼女の膝にすがりついてさめざめと泣き、「あなたのためだったら何でもしてあげるわ」と言いたい気もちに苛まれた。わたしはようよう、かすれた声で「そんなはずないよ」とだけ答えた。

中学一年生のときに、相模仁菜子と椎名咲で席順が前と後ろになって以来の長年の友人関係のなかで、わたしたちが同じ屋根の下で暮らしたことは一度もなかった。

シイナがいる家に帰ることの奇妙さは、どんな形容詞でも表しきれない。姿を消す前は法律事務所で働いていたはずだったが、どうやら辞めてしまっているらしく、彼女は一日じゅう家にいて、映画のＤＶＤを観ているか本を読んでいるかのどちらかだった。勤務先の大学図書館から帰ると、「おかえり～」といって迎えてくれる。簡単な食事を用意してくれていたりもする。わたしにとって、毎日の帰宅は気恥ずかしく、むず痒いものに取って代わった。だがそれ以上に、ふたりで同じ夜を迎え、同じ朝を待つということが、この上なく素晴らしい体験なのだと改めて気がついた。

知らぬうちに、この家には彼女の香りが充満していた。それは、冷蔵庫の中や洗面所の戸棚、ベランダのサンダルにまで深くしみ込んでいた。時折、自分の部屋を横切っているだけなのに、シイナの香りを追いかけているような感覚がして、困惑することさえあった。

だが、その香りには、かつてのシイナの痕跡は見られなかった。わたしの知っているシイナは、暇さえあれば絵を描いているひとだった。ところが今の彼女には絵筆を握る素振りすら見られない。住み慣れた町を捨てて逃げ出したとき、絵を描くことも捨ててしまったのだろうか。

このところ、二十代前半の頃のことをたびたび思い出す。当時、シイナは親元を離れてひとり暮らしをはじめたばかりだった。彼女は壁に直接絵を描いた。描かれているのはほとんどが判別不明の絵柄で、幾何学模様を組み合わせたものに見えたが、よく見てみると草花や動物がひょっこり現れたりして、まるで彼女の頭のなかにある、ごちゃごちゃと面倒な考えをそのまま描き出しているかのようにも思えた。

あの頃のシイナは、ちゃんとしたキャンバスだけでは飽き足らず、そうやっていつでもどこにでも絵を描く場所を求めていた。間借りしている部屋の壁に落書きをするなんて正気の沙汰でないことはわかっていたけれど、経験上彼女を止めるなんてどうやったって出来やしないことも知っていたので、そもそも止めようとも思わなかった。それどころか、食卓から運んできた不安定な椅子にのぼり、汚れるくらいならといってシャツを脱ぎ捨て、キャミソールから出た棒のような腕をいっぱいに伸ばし、残り少ない白い部分を求めて壁

の高い位置にまで描き続けるシイナの後ろ姿を眺めていると、愛おしさや羨望といった感情があふれ出してくるくらいだった。

とはいえ、当然ながら本人だってそれが常識に外れたことだと理解していたはずで、その証拠に、あの部屋を出ていくときには、預けていたわずかばかりの保証金ではまかないきれない、壁紙を張り替えるために請求された費用をきちんと支払ったようだった。

今、この狭い家のまん中に立って四方を見渡してみても、壁はどれも白いままだった。壁がきちんと白く保たれていることに、何ともいえない歯がゆさを感じた。

シイナを失っていた一年八か月のあいだ、わたしは様々な場所で彼女のまぼろしを目にした。大学の片隅のベンチに腰掛けていたり、多くの生徒に交じって食堂の列に並んでいたり、現実にはいるはずのない場所で目撃するため、どれもすぐに間違いであることが判明した。姿を消したときと同じく唐突に再び現れるところを日々夢想していたから、まぼろしを見かけるくらいのことはむしろ当然だったかもしれない。

自分がシイナを愛していると気がついたのが十七歳のときで、それからの十数年間は、想いを知られないよう気遣いながら、つかず離れずの距離で友人関係を続けていた。彼女が心を許してくれているのは、ふたりのあいだに存在する愛情がごくありふれた友愛の形をしていると信じて疑わないからであることを、ちゃんとわかっていたのだ。この美しく保たれた均衡を、崩したいと思ったことは一度もなかった。相手が女性であることをシイナに打ち明けずに恋人を持つこともあったし、反対に彼女の恋を見守ることもあった。友人として、近くにいられればそれでよかった。シイナの鈍感さが、わたしにとってはすごくありがたかった。

だから、彼女が姿をくらましたとき、心臓をちぎり取られたような苦しみを味わった。あのとき、彼女が直面した明広を失うという災難によって、同時に彼女の心からわたしの存在も失われたのだ。シイナの中で、わたしは一度亡霊になったのだろうと想像する。彼女にとっては、もしかしたらわたしはひどく憎むべき相手なのかもしれない。シイナは、わたしをその手にかけるために東京へやって来たのかもしれない。

シイナの目論見を察してから、夜中に足音をころした彼女が寝室に訪れるところを繰り返し想像した。眠っているわたしの首に両手をあてがい、ぐいと力を込めて握る。その場面を想像するたびにはっとなり、まぶたを閉じて体をこわばらせるはめになる。そうなることを望んでいるのかどうかは自分でもわからないが、もしも彼女が望んでいるのならば、そうなっても仕方がないとは思う。

あるとき、わたしは食卓に座り、勤め先から借りてきた本を読んでいた。経済学に関する難しい本で、同僚が勧めるので仕方なく借りたが、想像通り退屈な内容だった。数ページ読んで、きのうも同じ部分を読んだことに気づいたときにはほとほと呆れて、本を放り出した。そのあとうたた寝をしていたらしい。ふと、顔の近くに気配を感じ、ぱっと目が覚めた。すると、気配が顔のそばから遠のいた。体を起こすと、背後にシイナが立っていた。心臓がとびはねた。彼女はわたしを横目で見下ろしながら、自分の席に移動した。そして、いつもの低い声で「ねえ仁菜子、コーヒー淹れてよ」といった。わたしは胸がどきどきしたまま立ち上がった。調理台に近づき、震える手で粉を計った。ついさっき、彼女はわたしの顔に自分の顔を近づけていた。いったい何をしようとしたのか、それとも何もしようとはしていないのか、どちらにせよ、彼女の顔が接近していたことに変わりはない。もしも、とわたしは思う。もしも、シイナの指がわたしの前髪をやさしくかきわけ、唇がわたしの唇に触れるのならば、そのあとナイフを背中に突き刺されることがわかっていた

としても、拒否することができるだろうか。

シイナが荷物をすっかりまとめて再び姿を消したのは、その出来事から間もなくの、十月も末のことだった。彼女がうちにやって来てちょうど十五日めだった。そのときわたしが抱いた喪失感は、一度めに彼女を失ったときの比ではなかった。もう二度とこんな思いをしたくないと思っていたはずなのに。激しい痛みと後悔が全身を貫いた。どうしてうかうかとしていられたのだろう。どうして彼女の両手両足を縛ってでも、ここを去れないようにしておかなかったのだろう。

彼女は、この部屋でわたしの帰りを待つあいだ、いったい何を考えていたのだろうか。わたしは、何をしているときでも思考はいつもシイナへと繋がっていた。ふたり分の食材を持って並ぶスーパーマーケットのレジの行列も、ソファから垂れたブランケットの裾のいびつな形も、ベランダに干された種類の違うふた組の下着も、何もかも、ぜんぶがシイナへと繋がる思考の起因となった。だが、彼女の思考の道筋をたどろうとしても、わたしに繋がるものは何ひとつ見出せなかった。

想像の中で何度も見た後ろ姿だったけれど、実際シイナは背中を見せることなく、わたしのもとを去った。きっと、島へ戻ったのだろうと思った。直感が、追いかけるべきだと告げていた。向かう先にシイナがいるのであれば、それが正しいかどうかは別として、あるひとつの結果が生まれることは間違いなかった。わたしはすぐに荷造りをし、翌月の連休を待って船便を予約した。

船から降りたったとたん、潮をはらんだ強い風の洗礼を受け、もうすこしで手に持っていた鞄を離してしまいそうになった。海のない街で育ったわたしはわずかな潮の香りをかいだだけでも気分が高揚したが、そこへもってシイナに会いにいくという大きな責務を負っていることが、よりいっそうわたしの心をかき乱した。

何かの話のついでにシイナが、祖父母の家の最寄りのバス停と、近所の特徴を話したことがあった。それしか頼りにできるものはなかったけれど、たどり着けなければ、わたしたちの縁はその程度だったということがはっきりする。ここまで来たのなら、とにかく向かうしかなかった。

バスを降りてから、小石の散らばるあぜ道や雑草の目立つ側溝沿いの道をこれでもかというくらいに歩き、本当にこの道で合っているのかとその日何度めかの思案に暮れはじめた頃、右手前方にお地蔵様の祠が見えてきた。道にはみ出して軽トラックを駐車している民家のとなりにお地蔵様の祠が見えてくると、祖父母の家が近いっていう目印なんだ、とシイナがいっていた。目印を通りすぎると、彼女のことば通り、ほどなくわたしは目指していた家に辿りついた。

シイナの家は、ぐるりを肩の高さくらいの塀に囲われた、立派な平屋のお屋敷だった。都会育ちのわたしが普段から抱いている、田舎の屋敷に対する木造家屋の黒々とした外観のイメージとはちがって、漆喰で塗られた外壁は思いのほか明るい印象で、黒い瓦屋根とのコントラストが武家屋敷のようにも見えた。傷んでいるらしく、内側に開け放されたままの門扉はちょっと触れてみただけでもギィッという錆びついた不快な音をたてた。

「椎名」と書かれた木製の表札を再度たしかめてから、そろそろと門をくぐり、慎重な足取りで砂利敷きの短いアプローチを飛び石伝いに玄関へと歩いた。磨りガラスの嵌まった木枠の玄関引き戸の横に呼び鈴があり、指先が震えるのを感じながらゆっくりとボタンを押した。

そわそわと落ち着かない心を沈めながら待っていると、しばらくして引き戸ががらりと開いた。思わず、びくっと肩が震え、全身に緊張が走った。続いて、玄関口にぬっとシイナの顔が現れた。

シイナはわたしを見たとたん、やっぱり、という顔をした。きっと、こちらの顔にも同じ表情が浮かんでいたことだろう。やっぱり、シイナはここにいた。自分の力で彼女にたどり着いた。誇らしげな気分は、相手の無言のため息に吹き飛ばされた。シイナは、仕方ないな、という感じで肩をすくめ、わたしを家に上げた。

わたしとシイナは、広い居間の黒い大きなソファに座って向かいあった。シイナは無表情だったが、わたしは、そこに呆れやうんざりといった感情を読み取ろうとした。彼女が置き去りにしたかったもの、友情や、訣別、なれ合い、そういったものを背負って現れたわたしに、怒りさえ感じているかもしれない。けれども、どれだけじっくり眺めてみても、この瞬間彼女を支配している感情がどういった類いのものなのか、判断をつけることは難しかった。

やがてシイナは根負けしたように体勢を崩し、「あーあ、黙って出てきた意味がなくなっちゃった」といった。そして、この家の状態や来歴などを一方的に話した。放置されていた期間が長いため、家はとても傷んでいる状態で、移り住んでからずっとあちらこちらを補修しながら何とかやってきた、とか。普段は週に一回の買い出しと裏の畑で採れる野菜を食べて過ごしている、とか。自分もこの島で生まれ、五歳の時に東京に引っ越したのだ、とか。五年前に祖父母が亡くなって以来、いつかこの島に戻りたいと思っていたのだ、とか。

話を聞いているうちに、わたしにはピンとくるものがあった。それは今さら思いついたところで何の意味もない無情な考えであったが、間違ってはいないだろうと思った。彼女はきっと、明広と結婚したらこの家でふたりで暮らすつもりだったのだ。果たされなかったことをすでに知っている、頓挫した計画ほど無意味なものはなかった。

彼女の話が一段落したところで、どうして急に出ていったの？　と尋ねた。声に少々怒りを含ませてみたが、理由は特にないよ、戻りたかったから戻っただけ、と軽くはぐらかされてしまうと、情けない事に、何も言い返せなかった。

その夜、シイナはわたしのために寝間を一室用意してくれた。島の気温は本土よりも低いのか、十一月初旬の夜の空気は真冬と錯覚するほど冷たく張りつめていた。あたたかい布団にもぐり込んで目をつぶると、窓の外から秋の虫の鳴き声が細く聞こえた。

この部屋は普段は使っていない客間だそうで、入り口の正面に背の高い棚があり、折りたたみ式の台が壁に立て掛けてあった。窓は小さいものがひとつあって、障子が閉まっていた。障子にはまん中らへんに人差し指を突き刺したような穴が開いていて、電灯を消した薄い闇のなか、月明かりだろうか、ぽつんと丸い光の点が浮かび上がって見えた。ふしぎなことに、その丸い光は目をつぶっても消えなかった。途切れては聞こえる虫の声に従うように、まぶたの裏をゆうらりゆうらりと流れ続けた。

翌朝目を覚ますと壁の時計は八時過ぎを差していた。ひとまず台所に立ち寄って、流しに伏せてあったグラスに蛇口から直接水を汲んで飲み干した。それから、調理場の奥に勝手口があったので、何となく外を覗いてみた。そこは裏庭のようだった。庭というよりはむしろ砂利の目立つ広場みたいな空間で、隅には自転車牽引式のリヤカーがあった。自転車は首をぐるんと後ろに回した状態で停められていて、大きな車輪がふたつもついた荷台

と繋がっているのだから滅多なことではバランスを崩したりはしないはずなのに、なぜだかちょっとした風が吹いただけでも煽られて倒れてしまいそうな、そんな気がして目が離せなかった。

シイナは、トーストと炒り卵というかんたんな朝食をわたしに用意してくれた。

「リーピは元気？」炒り卵に添えられたトマトをフォークで突き刺しながら、シイナの家で飼っていた猫のことを尋ねてみた。ギリシャ語で『悲しみ』という意味の名を持つ彼女の猫は、たしか今年で十二歳のはずだった。

リーピは、シイナが十八の誕生日を迎えるすこし前に椎名家にやって来た。当時まだ彼女の実家に頻繁に出入りしていたわたしは、どこだかから貰われてきたという産まれたばかりのほんの小さな子猫が椎名家の面々にお目見えされたその瞬間に、たまたま居合わせていた。真っ白なタオルにくるまれた淡いシルバーの毛が濡れたように輝いていたことをよく覚えている。

飼い猫に『悲しみ』という名をつけたのはシイナのお父さんだった。言語学者である彼女のお父さんはギリシャ語に造詣が深く、後に大学で英文学を専攻するほどヨーロッパの文化に傾倒していたわたしは単純に格好いいなと思っていたけれど、シイナは「父のそういったところが非常に感傷的で、どうしようもなくわたしを苛つかせるのよ」と、暴言ともとれる発言をしてわたしをはらはらさせた。

その頃シイナは大学で法律を学んでいて、在学中に、卒業してからも一度、司法試験に臨んだが、残念ながらいずれも失敗に終わっていて、二度目の受験のあとに「これで落ちたらもう二度とこんなやっかいな試験を受けるつもりはない」といっていたことば通り、あっさりと勉強を辞めてしまい、絵の道に進んだのだった。

シイナが法律家を目指したのは、裁判官だった母方の祖父の影響があるようだが、幼い頃から父親に研究者を志すよう植え付けられたことへの反抗のつもりもあったのかもしれない。そして、研究者への道は弟の泰人に譲り、自分は画家になるといって家を飛び出したのもまた、父親を強く意識してのことだったと、傍で見ていたわたしには感じられた。

シイナが好んで絵を描いていたことは周囲の誰もが知っていたけれど、あれほど懸命に試験に向けての勉強をしていた彼女がまさか画家になるといい出すなんてことは誰も想像できなかったはずで、彼女の夢物語のような話を聞かされたひとたちは皆、それぞれに驚きや、困惑や、あるいは沸騰するような怒りの感情を覚えもしたが、忠言めいたことをいえる者は誰もいなかった。

もちろん画家になるといってもそうかんたんになれるわけはなくて、大学の先輩のつてで法律事務所の事務員としてアルバイトをしながら絵を描きためていた。彼女の部屋に遊びに行くとよく、そこらの床に描きかけのキャンバスがいくつも放り出されていて、シイナはそれらを跨いで部屋を横切っては、絵筆と箸をいっしょに持って食事をしていた。彼女の絵には明確なモチーフはあるけれど物語性はなく、それでいて訴えかける何かがあった。まるで文字のない詩のようだとわたしはいつも思っていた。

二十代前半の頃は何度か自費で展示会を開いていたが、頭に浮かんだイメージを何にも変換せずにそのまま吐き出したような独特な画風は多くの人の共感を得にくく、わたしが知る限り、彼女が絵で生計を立てるところにまで至ったことは、残念ながらこれまで一度もないはずだった。

そんなわけだからシイナに多額の貯金があるとは思えず、長く勤めた法律事務所も辞めてしまったらしい今、これからどうやって暮らしていくのか、見通しが立っているようには到底思えなかった。

「悲しみは長生きなんだね」とわたしは呟いた。

「リーピももうおばあさんよ」
シイナはそういったが、そのせりふにあまり感情が込められていないような気がして、彼女がその腕に猫のリーピを抱き上げたのはいったいいつが最後なのだろう、と思った。

食事のあと、洗い物はわたしがするといってみたが、きっぱりと断られた。しばらくして彼女がふたたび居間に顔をのぞかせたとき、わたしはきのう港でもらった島のパンフレットを眺めていた。ところが彼女は、顔を上げたわたしと目が合っても何もいわずにこちらに微笑みかけただけで、またとなりの台所にこもってしまった。

その後いっこうに出てくる様子がないものだから、昼食のために何やら手の込んだ料理でも作っているのかと思ってこっそり台所を覗くと、真剣な面持ちで調理台を磨いている彼女の姿があった。研磨剤がたっぷりとしみ込んでいるのだろう黄色いスポンジを持つシイナの裸の手は、ステンレスの調理台がぴかぴかに磨かれていけばいくほど擦り切れていきそうな気がして、わたしは思わず「あっ」と声を上げてしまった。だが、脇目も振らずに手を動かしている彼女の耳には届かなかったようだ。

それから数分間そこに立ったままシイナの姿を眺め続けていた。けれども、彼女の方からわたしの存在に気がつくことは永遠にないのかもしれないと思われはじめ、わたしはため息をついて、居間に戻った。

座面のやわらかなソファに沈み込むように座っていると、この無用に過ぎていく時間は、わたしがシイナを待っていることに費やされているのではなく、彼女の方がわたしを待つのに費やされているのかもしれないと思えてくるのだった。もしかするとシイナは、わたしが黙って帰っていくのを、辛抱強く待っているのかもしれなかった。

じっとしていることに耐えられなくなり、家を勝手に見て回ることにした。そんなわたしをひどく驚かせたのは、寝間として与えられた部屋とは反対側の、奥まったところにある一室の扉を開けたときだった。

部屋に入ったとたん、まず強い臭いに襲われた。油絵の具の臭いだった。突然のひどい臭いに思わず躊躇したわたしの目は、カーペットの上に置かれたイーゼルや描きかけのキャンバス、壁に立て掛けられた何枚もの作品が、順番に目に入った。そして、壁に視線を移した途端、驚愕と歓喜がごちゃ混ぜになったような入り組んだ感情が、腹の底から、まるでスタジアムの歓声のようにわーっというざわめきとともに沸き起こった。それは心のなかで叫ぶ自分の声だった。

そこには、壁に咲く花があった。ちょうど入り口から見て右側の、やや黄味がかった白い壁に、わたしが手を思いきり広げたところで到底抱えきれないくらい大きな薔薇の絵が描かれていた。

重なるようにみっつ、萼から上の花冠の部分だけが描かれた壁の薔薇は、可憐とはいい難いけれど、ひとつひとつの花弁のゆらめきにさえ力強さが感じられ、見ていると、持て余すほどのエネルギーに満ちた、かつてのシイナの姿が思い起こされた。

「見つかっちゃった」

背後からの声にびくりとして振り返ると、シイナが立っていた。

この絵はあなたが描いたの、とか、いつの間にこんな絵を、とか、絵について何でもいいからシイナに尋ねたいのに、どれもことばにならず、ああ、というため息のような感嘆の声ばかりが口の端からこぼれ出してくるのだった。

彼女がもう絵を描いていないかもしれないなんて血迷ったことをちらりとでも思い浮かべたわたしはなんて愚かだったんだろう。シイナが絵を描かないなんて嘘。そんなこと、

あるはずがなかったのだ。
「この洋間はほとんど使ってなかったみたいで、壁紙がきれいな状態だったんだ」
壁紙さえきれいだったら絵を描くこと自体はあたり前であるかのように、シイナがいった。
ふと、やがてこの壁を埋め尽くしたらいったい彼女はどこにキャンバスを探すだろう？という考えが頭をもたげ、「ねえシイナ」とわたしは彼女の方を見ずにいった。「今度は、わたしをキャンバスにして絵を描いて」

シイナは一瞬ふしぎそうな顔をしたが、すぐに合点がいったようで、「ああ、いいよ」といった。中学時代、アクリル絵の具を使って手の甲に絵を描いてもらったことがよくあった。わたしの頭にはそのときのことが浮かんでいたが、シイナも同じ情景を思い浮かべていたと思う。
シイナが画材を用意するあいだ、居間のソファに座ってじっと待った。ものすごく長く待ったように思えたけれど、大して時間がかかったわけではなかったのかもしれない。ようやくシイナが現れ、両手に持った絵筆や絵の具をばらばらと音を立ててローテーブルに置いた。そして、わたしの横に腰かけ、自身の手をこちらに向かって差し出して、「さ、手を出して」といった。
わたしはそれには応じず、心に決めていた通り、シイナにさっと背を向けて、着ていたブラウスのボタンを手早く外しはじめた。急いですべてのボタンを外し、袖は半分通したまま、背中の向こうへするりと落とすようにブラウスを脱いだ。そして、袖が残ったままの両手を後ろに回してブラジャーのホックを外し、裸の背中をさらした。「こっこへ」とわたしはいった。
息をひそめて待っていてもシイナはいっこうに何も応えてはくれなかった。いいかげんこちらの心臓が持ちそうにもないと思われはじめた頃、ようやく彼女は「わかった」と小さくいった。
それから、パレットの上で絵の具を混ぜ合わせるような音が聞こえてきたかと思うと、何の前触れもなく絵筆の先が肩甲骨の辺りに触れた。その冷たさに思わずひゃっと声を上げ、からだを仰け反らせてしまった。
「動かないで」
厳しくいい放つと、シイナはわたしの腕を両側からがっしりと掴んでからだをもとの位置に戻した。わたしはごめんと謝って、それからは動かないようじっと我慢していたが、肌に毛先が触れるのが思った以上にこそばゆくて、耐えるのに必死だった。それに、ソファに横を向いて座っているので片方だけ曲げた足がじんじんと痛かった。すこし描いたところで「邪魔ね」といって、シイナはわたしの袖に残っていたブラウスと下着を引ったくるようにしてはぎ取った。何となく気恥ずかしさもあって全部を脱がずにおいたのだが、上半身だけとはいえすべてをはぎ取られてしまうと、あまりの無防備さに気が動転しそうになった。シイナは直接わたしには触れていないはずなのに、絵筆を通して彼女と繋がっているのを感じるだけで気もちがふわふわとどこかへとんでいきそうだった。わたしの貧弱で狭い背中だけでは飽き足らないのか、ときどき肩や腕にも絵筆が触れた。どんな絵が描き出されているのかとても気になったが、シイナに声を掛けるのは邪魔をするようで憚られた。
やがて、ゆっくりと絵筆を置いたシイナが、完成よ、といった。わたしはため息をついて、固まったからだを緩めた。
シイナはわたしの手を引っぱって立たせ、こちらが同じ体勢でいたせいで足がしびれて

つんのめりそうになっているのもお構いなしに無理やり歩かせ、洗面所へ連れていった。胸が露になった裸の上半身が洗面台の曇った鏡に映っていた。その横にひょいと顔を出したシイナの姿が映って、鏡越しに目と目が合ったときには顔から火が出るような思いがした。

「こっちを向いて」

シイナに従ってくるりとからだを半回転させ、彼女の顔を直接見るのが恥ずかしかったので素早く後ろを振り返った。背中いっぱいに、たくさんの赤い薔薇が咲いていた。それは間違いなく彼女のタッチで、大げさなくらいの躍動感があり、手を伸ばせば掴めそうだった。また、こちらの薔薇は壁に咲いていたものよりもいっそう華やかで明るく、まるでどの花もにこにこと笑っているようで、たいそう可愛らしく見えた。

「芸がないかもだけど、薔薇にした。人のからだをキャンバスにしたのははじめてだけど、面白いものね」

「いつだって描いてもいいのよ」

「ううん、もうこれで終わり。さ、洗い流しなさい」

そういって、シイナはわたしをとなりのお風呂場の方へ押しやった。

「え、もう？　もったいないからしばらくこのままでもいいよ」

「だめだよ。服が着られないでしょ。アクリル絵の具だからすぐ乾くとはいえ、あなたの白いブラウスに絵の具がついちゃう。それに、人体にあまりよくはないのよ、絵の具って。だからすぐにでも洗い落とすべきよ」

有無をいわさぬ強さでそういって、シイナは近くの棚にあったバスタオルをわたしに手渡してくれた。わたしは思わず声を張り上げた。

「ねえシイナ。今さら何をって思うかもしれないけど……、わたしはあなたの力になりたいの。はじめに連絡をくれたのは、何か、わたしに何かを求めていたからじゃないの……。うぬぼれかもしれないけど、でも」

シイナはやさしく笑って首を振った。そして、戸惑うわたしに向かって、「お湯が出るようにしておくから、すぐに入れるわ」といって洗面所から出ていってしまった。

仕方なく、全部服を脱いで熱いシャワーを浴びた。下を向くと、赤っぽく染まったお湯がタイルの目地のあいだを通って排水溝に吸い込まれていくのが見えた。ほんの一瞬だけ背中に咲いた花は、あっという間に流れていってしまった。心もいっしょに流れていってしまわないように、胸の前で腕を交差させ、両手でしっかりと自分の肩を抱いた。

わたしが明広の死の知らせを受けたのは、梅の花も凍り付く二月も末の寒い冬の朝だった。

窓辺に立って、マンションの5階からの景色を阻んでいる憎らしい結露に指を這わせながら、霧がかったような、はっきりとしない寝起きの頭に浸透するシイナの声の心地よい低音にふたたび眠りを誘発されそうになっていたわたしは、語調を変えることなくさらりと婚約者の死を告げる彼女にまったくついていけず、「えっ」とひと言いったきりことばが尽きてしまった。

明広の死の原因には、バイクに乗っていた本人の前方不注意があったことは明らかなようだった。普段は誰よりも慎重な彼が、どうしてバイクでの走行中に脇見をしたのか、彼を知る誰もが抱いた疑問に対する答えをくれるはずの当人はもうどこにもおらず、絶えて結着することのない「どうして」だけが、宙ぶらりんのままそこら辺に漂っているような感じがした。

病院で顔をあわせたシイナが「わたしが呼んだのよ」とぼそりといったときには、彼女

の気もちを想像するだけで涙が出そうになった。「あなたのせいではないわ」と答えたけれど、青白い顔を歪ませながら何度も首を振る彼女を見ているうちに、もしかしたらシイナは、明広が事故に遭ったとされる時間に、おそらくは心のなかで彼に呼びかけたと、そういいたいのだろうかと思った。けれども、だとしてもわたしに掛けられることばは他にはないのだった。

明広とシイナを引き合わせたのはわたしだった。

彼とは大学の同級生で、後にお気に入りとなる教授のはじめての授業で隣り合わせたのをきっかけに仲良くなった。彼の、高すぎる背を持て余すかのようにいつもどこか遠慮しているみたいな、それでいて卑屈には見えない愛嬌のある態度を好ましくは思っていたけれど、小柄なわたしと並んで歩くときに保っている包み込むような距離感には、このまま彼に寄りかかればきっとその腕にすっぽり収まってしまうのだろうなと感じるところがあって、どちらかといえば勘の悪い方ではないので、もしかしたら彼はわたしに思いを寄せてくれているのかもしれないと、ほどなく気がつくようになった。だけど、もしそうだったとしても、その気もちに答える準備など、こちらにはなかった。

もとを正せば、わたしが彼を愛せない理由を明広にちゃんと打ち明けなかったのが悪かったのかもしれない。けれども、それを誰かに話すということは、わたしにとって、胸に腕を突っ込んで心臓を差し出すくらいに乱暴で、恐ろしいことだったのだ。

明広には申し訳ないが、わたしの中にはすでに燃えるような情熱があり、その情熱の炎はある一か所に向かって激しく燃え、永遠に消えることはないとわかっていた。

だが、そんなことをシイナに知らせるつもりはまったくなかったし、彼女に何かを求めようなんて、考えたこともなかった。ただ、誰にだって経験はあると思うけれど、大した理由もなく人生に絶望し、生き方に迷う時期があって、不毛な友人関係を続けることに嫌気が差したわたしは、ことばは悪いがシイナに明広を充てがってしまえばすべては解決するのだと浅はかに思い立ち、実行に移したのだった。

ふたりを引き合わせてからほどなくして、彼らはつき合いはじめた。交際を始めてからのシイナは、まるで痛みを感じているように見えるほど明広を愛し、必要としていた。彼女には、そういうどちらかといえば極端な愛し方をする傾向がこれまでにもあったが、明広の場合はとくべつなように見えた。そんな彼女に、明広の包容力がぴたりと当てはまったのだろうと思う。

それから、いくつかの波瀾はあったが、ふたりの交際は順調に続いていた。そして、シイナの誕生日に籍を入れることを計画していると話してくれたのが、わたしたちが二十七歳の夏のことだった。

だが、そのすぐあと、風向きがいっぺんに変わってしまう出来事が起こる。信じられないことに明広は、何かのきっかけで再燃したわたしへの思いを、よりにもよってシイナ本人に打ち明けたのだった。彼らのあいだでどのような話し合いが行われたのかは、知らない。だが入籍は引き伸ばされ、ふたりの距離がじわじわと離れていくのは傍で見ていてよくわかった。

そして、それからまもなく、明広の死がわたしたちを迎えたのだった。

明広の死がシイナに与えた影響は計り知れない。彼女は通夜にすこし顔を出しただけで葬式にも姿を見せなかったし、月命日に彼のお墓に花を供えに行っても、彼女が来た形跡を見つけることはできなかった。

シイナは、わたしを憎んでいるに違いない。彼らの結婚に水を差す原因となったわたし

を、本当は許せないのだろうと思う。だから、姿を消した。
だが、そんな考えに振り回されているわたしは、彼女のことを何もわかっていなかったのだ。

七時頃に夕食を食べたあと、相変わらず片付けは自分でやるといって聞かないシイナに台所から追い出されたわたしは、ソファでひとり夕食の残りのワインを飲んでいたが、いつの間にか眠り込んでしまっていた。
遠くに水の湧き出るような音が聞こえ、目を覚ました。ソファの座面に手をついて身を起こすと、頭の芯がキリキリと痛んだ。いまにも消え入りそうなのにいつまでも止まない水音が気にかかり、わたしは手のひらで側頭部を押さえながら立ち上がった。部屋の空気はぶるりと震えるくらいに冷えており、着ていたカーディガンの前をさっと合わせた。室内は真っ暗だったが、窓にカーテンが閉められていなかったためわずかな月明かりを頼りにゆっくりと移動することが出来た。シイナはどこにいるのだろう？　この水音のもとに彼女はいるのだろうか。
床を擦るような注意深い運びで歩を進め、ようやく壁際に辿りつきスイッチを入れると、ぱちぱちと弾くように二度素早く点滅し、蛍光灯が点いた。眩しさに顔をしかめながら時計を見ると三時過ぎを差していた。わたしは胸騒ぎを覚え、逸る気もちを押さえながら、そちらではないような気はしたが、念のためとなりの台所を覗いてみた。するとそこには思ったとおり誰もおらず、ただ夜の冷ややかな空気だけが重々しく居座っていた。
台所でなければ洗面所だろうかと考え、廊下に出た。やはり音はそちらから聞こえてきているようだった。シイナはこんな時間にお風呂に入っているのだろうか。まさかとは思ったけれど、洗面所に辿りついてみるととなりの風呂場に電気がともっていて、閉じられた中折れ戸の向こうから、いよいよ大きくなってきた水のしたたる音が聞こえている。わたしの不安は最高点に達し、震える腕を伸ばして浴室の扉をぐっと押し開いた。
その瞬間、開いた扉の隙間から逃げるように熱気があふれたが、それも束の間のことで、おそらくわずかに残っていたさいごの熱気だったのだろう、すでに浴室内はかなり温度が下がっているようだった。そして、入り口に立ち尽くしたわたしの目にとび込んできたのは、半分ほどお湯の張られた浴槽に、沈むように横たわるシイナの白いからだだった。
内臓を裏返すような勢いで涌き上がってくるわななきを、わたしは必死に喉の奥で堪えた。小刻みに震える手足を押さえようとしたが適わず、その一方で頭は機能を停止してしまったかのようにうまくは働かないのだった。それでもシイナを助けなきゃという考えがわたしを動かし、浴室のタイルの上に一歩を踏み出した。タイルはひんやりとして冷たく、彼女が入浴してから長時間が経過していることを思わせた。洗い場に据え付けられた水栓を見ると蛇口からわずかに水がしたたり落ちていて、それが今回わたしをここまで導いた原因であることが知れた。わたしはまず蛇口の栓を閉めてから、シイナの方を振り返った。彼女はかろうじて顔を水面に出しており、浴槽の傍にかがんでおそるおそるその口もとに耳を寄せてみるとかすかな息づかいを感じ、わたしは全身から力が抜けたようにその場に尻餅をついて座り込んだ。
肩で息をしながら何とか身を起こし、ゆっくりと湯に手をつけた。それはまだほんのりと温かかったけれど、人が快適に浸かっていられるような温度では到底なかったため、わたしの心臓は縮み上がりそうになった。とにかくシイナをここから出さなければと思い、彼女の脇の下に両手を差し入れ、不安定な体勢ながらも引きずるようにしてこちら側へ抱き寄せた。シイナの裸のからだは意外なほどになめらかで、ぐっと指に力を込めて掴もうとすると吸い付くようでわたしを驚かせたが、肋骨が浮き上がるほどに痩せ細っているの

は想像通りだった。それでも、水が絡まりついてくるせいか思いのほか重くて、からだ全体を引き上げるのには相当な苦労を要した。ずぶ濡れになりながらもひとまずシイナを浴室のタイルの上に横たえ、そのとなりに座り込んで息をついた。それから脱衣所に引き返し、棚から引ったくるようにしてバスタオルを何枚も掴んで戻ると、シイナのからだをぐるぐると何重にもくるみ込んだ。そして、「シイナ、シイナ」と彼女の耳もとでささやくように呼びかけた。もし彼女が目を覚まさなかったら引きずってでも寝室に移動させなければいけないと思いはじめたころ、喉を詰まらせたようなうなり声を発したシイナが、わずかに顔をしかめながら薄く目を開いたのだった。

「シイナ！」わたしは叫んで彼女の顔を両手で包み込んだ。シイナ、どうしたの、だいじょうぶ、気がついたの、と思いつくままにことばを連ねるわたしを、シイナはぼんやりと見つめた。そして、ああと小さく呟いて、驚いたことには、頬を歪めて笑おうとするのだった。わたしは溢れ出る涙をどうしても止めることが出来ず、彼女のからだを無理やり抱き起こし、バスタオルで固く包まれた肩に顔を埋め、声を上げて泣いた。

目を覚ました彼女は何とか自分の足で歩いてくれたので、抱えるようにして居間へ連れていき、すぐに暖房をつけて部屋を暖め、冷えたからだを拭いて新しい服を着せた。そこでようやく、わたし自身もかなり濡れていることに思い至り、部屋から代わりの服を取ってきて手早く着替えた。低体温症を心配し、診療所に連絡しようとすると激しく嫌がったので、どうするべきか迷ったが、体温を測ってみたら平温だったため、とりあえず様子をみることにした。もしもあのままの状態で朝まで過ごしていたらほんとうに危なかったかもしれない。そう厳しく訴えると、わたしが淹れたココアを飲みながら、ついうっかり睡眠導入剤を飲んだことを忘れてお風呂に入っちゃったのと、シイナは笑った。

うっかりしていたのはそれだけではあるまい。彼女はその前にわたしといっしょにアルコールを摂取している。そのこともうっかり忘れて睡眠導入剤を飲んだというのか？　それは確かに適量だったのか？　そして、わたしを襲った急激な眠気もまた、薬の作用だったのではないか？　追求してやりたい事柄はいくつもあったけれど、死の縁を巡ってきた当人以上に疲弊し、いまだ放心状態を脱しきれなかったわたしは、彼女を責めることで自分自身が追い込まれていくようなあべこべの感覚がどうしても拭い切れず、それ以上何もいうことが出来なかった。シイナを本気で失うかもしれないという危機に瀕したことは、そうなったときにいったい自分はどうなるのだろうとこれまで漠然と抱いていたイメージを遥かに越えて、わたしをぼろぼろに擦り切れさせたのだった。

とにかくほんとうにもう大丈夫だから、寝よう、というシイナをわたしがあまりにも心配そうな顔で見ていたからだろうか、まるでこちらが庇護されるべき弱い立場の人間であるかのように、そんなに心配ならいっしょに寝てあげるから、とやさしくシイナはいうのだった。

それから、促されるままに彼女の部屋へ行き、狭い布団で折り重なるようにしていっしょに眠った。これほど近くで眠ったのははじめてだったけれど、もうずっとわたしたちはこうしてぴったりとくっついて眠ってきたのではないかと思えるほど、それは自然なことだった。先に眠ったシイナが息をするたびに寝間着の胸の辺りがゆるく上下し、その規則的な動きがとても安心できたので、そっと彼女の胸のふくらみにてのひらを当てた。それからすぐにわたしも眠ったようだった。

茫洋とした果てのない夢のなかでかすかな物音を聞いた気がしたけれど、怠惰なわたしは、浅い眠りの端をうろうろと彷徨いながら目を覚ますのを拒み続けていた。ようやく眠

りに終わりが告げられ薄く目を開けると、シイナはもう布団のなかにいなかった。壁の時計を見ると、九時半を差していた。

さっと着替えてから慌てて庭へとび出してみたら、リヤカーがなくなっていた。シイナはいつ出ていったのだろう。それは、彼女ならあって然るべき予想の範囲内の行動であるとほっとするべきか、それとも昨夜のことを考え合わせて憂慮するべきか判然としなかった。死にいちばん近しいところにいるひとの、綱渡りのような危うい行いにはっきりとした意味を見出すなんてことは無茶なのかもしれない。

シイナが死を明確に意識していることは、もう疑いようがなかった。ただ、これまでそれを安易に選択してこなかったのは、生きながら死を身近に感じることで、途方もない懺悔を続けるためだったのかもしれない。きっとシイナは、どこかで人生のひずみが訪れ、死が偶然に彼女を奪い去ってくれるのを、いまかいまかと待ち望んでいるのだ。不意に訪れるそんなひずみを敏感に察知して、彼女を引き戻し続けることが、果たしてわたしに出来るのだろうか。そもそもそれがほんとうに彼女にとって喜ばしいことといえるのかどうかさえ、さっぱりわからないのだった。

どこからか、おーい、と呼ぶ声が聞こえて、それも声が天から降ってきたような気がしたものだから、まさかと思う間もなく反射的に頭上を振り仰いだが、そこには薄い空が広がるばかりで当然ながらわたしを呼ぶ声の主などがいるはずもなく、そんなばからしいことをやっているうちにもう一度、おーいと、今度は確実に通りの向こうから聞こえてきたのがわかったので振り返ると、裏庭の塀の向こうから自転車を漕いでやってくるシイナの姿が見えた。

塀の一角に木戸を見つけ、ノブを回してみたら鍵が空いているようだったので扉をそっと開き、外へ出た。するとシイナの方もちょうどこちらへ辿りついたところで、わたしの目の前にリヤカーを止め、勢いよくいった。「仁菜子、乗りな！」

目を丸くしているわたしに向かって、シイナは片足をペダルに掛けたまま、突き出した親指で後ろの荷台を示し、こちらに笑顔を向けた。

どうしてシイナはどんなときでも笑うのだろうとぼんやり考えていると、しびれを切らした彼女が身を乗り出して腕を引っぱるものだから、仕方なく、よろけながらリヤカーの縁に足を掛けた。朝から買い出しに行っていたのか、それともどこかで貰ってきたのか、荷台にはたまねぎやかぼちゃが直接放り込まれていたので、それらを避けながら、箱形の荷台をまたいで乗り込んだ。その瞬間に感じたのは、自分のからだが軽くなってふわりと宙に浮くかのような感覚だった。そして同時に、ああそうかと腑に落ちたような気がした。シイナがどうして笑うのかはわからないけれど、彼女の笑顔は彼女をこの世界に繋ぎ止めている接着剤のような役割を担っているのだと。

わたしは自転車に背を向けて座り、立てた膝を抱えた。しばらくして、彼女は何もいわずにペダルをぐっと踏み込んだ。感心したのは、その消耗した細いからだにわたしを荷台に乗せて自転車を漕ぐような力がまだ残っていることだった。

自転車はゆるやかに発進した。リヤカーの荷台に乗ったのははじめてだったけれど、乗り心地は非常に悪かった。田んぼや畑のあいだの細い道を進むうちに、敢えてシイナがそういう道を通ったのかもしれないが、やたらと下りばかりが続くようになって、わたしを乗せた荷台の重みも助けてか、みるみるうちに風を切るくらいの速度まで上がっていった。荷台の横についた大きな車輪の片側が小石に乗り上げるたびに、大げさではなくほんとうに、からだが放り出されるような感覚がして肝を冷やしたが、おそらくこれはシイナにしてみればおおむね安全運転の部類に入るのだろうと想像された。どうしてリヤカーで走っ

ているのかがよくわからなくて、その疑問を大声で問い質してみたけれど、彼女にしても「そんなのわたしだって知らない」というばかりで、この突然のドライブが明確な目的をもって開始されたわけではなく、なりゆき任せで行われていることがはっきりしたのだった。そうするうちに向かっている場所の見当が何となくつきはじめ、それは経験則に基づく予想などではなく、前方に海が見えてきたからなのだった。海は、見えはじめたと思った瞬間にはものすごく傍まで近づいていてわたしを驚かせたけれど、それは地形が見せたちょっとした魔法だったようで、こちらの方がすこし迫り上がっているため、低い位置にある海は相当近寄らない限り陸地からは見えにくくなっているようだった。海岸へまっすぐ下る道へ出ると、シイナはまるでそうすればギアが上がるかのようにすっと腰を浮かし、ペダルを漕ぐ足に力を込め、一気に速度を上げた。どちらかといえば速度が上がったからというよりも地面が砂浜に変わったためにバランスが取りづらくなり、必死に荷台にしがみついた。やがて無謀な暴走運転は終に完全に砂浜に車輪を取られることになり、わたしのからだはたまねぎやかぼちゃとともに空中に放り出され、束の間の浮遊の後、その柔らかな砂地に身を横たえる寸前に見えたのは、自身も宙に投げ出されながらもペダルが空回りする自転車に食らいつくようにまっすぐに手を伸ばしているシイナの横顔で、そのときそこに笑顔を見たような気がしたけれど、海の向こうから差し込む金色の光がすぐに彼女の姿を飲み込んでしまったので、ほんとうのところはわからない。

（了）

（原稿用紙　五十九枚）